

論文

お夏清十郎と中動態

三 脇 康 生

1、はじめに 奇妙の海と山の合流について

姫路市の浜手の生まれの筆者が、この記事を読んだときの筆者の違和感は計り知れない。なぜ浜手の文化の屋台を姫路城下でかついで奉納できるのか。この精神が理解できない。文化の精神はない経済のみの新自由主義の成果なのだろうか。これではお夏清十郎に申し訳ない、これがこの論文でまずは言いたことである。

<引用開始> ^(注1)

「ザ祭り屋台」 2トンみこしが9台 姫路城広場を練り歩く

姫路市は5月20日、祭り屋台と呼ばれる重さ2トンのみこし9台が駅前大通りと姫路城の城内広場を練り歩く「ザ祭り屋台in姫路」を開く。開催時間は午前10時から午後4時まで。姫路の味を紹介する「食のコーナー」も設ける。15万人の来場者を見込む。

<引用終わり>

2、お夏清十郎まつり

一方、姫路市ではこのような清十郎の浜手とお夏の山側（城側）を無理やり合流させたりしない祭りも堅持している。それは以下である。 ^(注2)

<引用開始>

「第73回 お夏清十郎まつり」について

- 公開日：2023年8月1日
- 更新日：2023年8月3日

資料提供日

令和5年8月1日（火曜日）

担当課

担当課 姫路市観光課

担当者 観光にぎわいづくり担当 石田、山本

電話番号 079-221-1500

開催日時

令和5年8月9日（水曜日）

午後3時から午後8時まで

雨天中止、小雨決行

開催場所

慶雲寺、野里商店街 ほか

主催

お夏・清十郎顕彰会、お夏清十郎まつり実行委員会

内容

今年度の「お夏清十郎まつり」は慶雲寺における供養祭を中心に、姫路市消防音楽隊の演奏や人形浄瑠璃、紙芝居、慶雲寺南側駐車場でイベントなど、コロナ禍を乗り越えて久々の本格的な開催となります。（詳しくは、別添チラシをご覧ください。）

- 人形浄瑠璃、紙芝居 慶雲寺本堂にて（午後

3時から)

- ・ 供養祭 慶雲寺比翼塚にて(午後4時から)
- ・ イベント 慶雲寺南側駐車場にて(午後4時30分から)

催しに関するお問い合わせ先

お夏・清十郎顕彰会

事務局 電話079-281-2828(イトキチ内)

添付資料

第73回お夏・清十郎まつりパンフレット

- ・ 「第73回お夏・清十郎まつり」パンフレット



このパンフレットを読むにつけて、小学校の子供や高校生が参加して、悲恋のお夏と清十郎のカップルを追悼するのだが、しかし、清十郎の室津でのあり方、室津という港まちで大きな産業を担った娼婦の存在や、海文化と山文化の衝突の様子はどこにも伺えない。むしろ弔いの祭りといっても、このよう

に表面的な行事としての目的を持つ祭りであったからこそ、城の改築費のための冒頭のような、海と山の文化さを無視した屋台祭りも(この祭りとはまた異なった祭りであるのが冒頭で示した祭りで、もう2000年代に行われ終了はしているはずだが、いつ復興するかはわからない)行えてしまったのかもしれない。弔いの鬱状態は躁状態との混合状態であり得る。

3、西鶴について

このお夏清十郎を西鶴の作品として良いか議論があるという、それこそ批評家ロラン・バルトの流のテキスト理論でいうと作者は死んでいるのだからどうでもいいのだろうが、研究者の木越治は、『好色五人女』は大変に重要な位置にあるので、その作者が西鶴自身であるかどうかはどうでも良いと言い切っている。^(注3)ここでは、それに従い西鶴個人作かどうかではなく、西鶴という問題群が書いたとして考えていく。

この特集で、小野谷敦は次のように書いている。西鶴の筆法と発送法は、俳文であり、文章を連歌風に寸断している。連歌自身が短歌の叙情を寸断することを目的とした。俳諧連歌はさらにそこから距離を取ろうとするものであり、西鶴は冷めた目で描いているとし、西鶴は町人社会を舞台とし源氏物語からの逸脱を図るために遊里での話に導くとする。^(注4)また、同じ特集号で、ヤン・シーコラは、江戸の京都江戸大阪で特有の流動性を指摘する。「西鶴が生まれたこの寛永年間から病死した元禄までの半世紀は、日本の経済史上もっとも飛躍的な時期であったといっても過言ではない。何しろ、一六世紀までは金銭が部分的に流通していただけに過ぎなかったものが、十七世紀になるとまもなく、金・銀・銅銭の三貨が全国的に使われるようになり、いわゆる貨幣経済時代に突入し、それを担う商人が新興階級として登場し、政治以外の経済・文化を牛耳るに至ったのである」。^(注5)ここにおいて、もはや投機市場的ではない桃山時代から芽生えていた営利の思想が重

要となったとしている。源氏物語の「恋」ではなく遊里での「遊び」には経済的な背景があるのだ。享保にかけて街道も整備され温泉にも人が行くようになるなど、貨幣が回り始める。伊勢まいりの際にも、精進落としの場所として元禄時代から「古市遊郭」ができるのは有名だ。だが軍事については大きな資金が鎖国により必要とされず、よって鉱山も（これは戦後の原子力平和利用まで引き続くのだろう）軍事用に採掘の限りを尽くされるまでもなく、金銀銅が重要視された形跡が江戸時代にはある。江戸は金、大阪は銀が普及し、開国時には金銀の交換の日本のしつけに外国が介入し混乱が起きたように、江戸時代の日本は独特の金銀銅価値を作っていたのだ。

^(注6) 西鶴はのちに町人もの、しっかりと鎖国時代を生き抜く商人の意識レベルへと照準を変化させていくが、まずはこのような貨幣の流通が派手に表に出てくる遊郭に着目したのではないだろうか。

4、お夏清十郎の紹介

1686年、『好色五代女』を西鶴は出版するとされている。

中右 瑛のブログ (KOBBEKO) を引用する。^(注7)
 <引用開始>

〈前号までのあらすじ

播磨室津の造り酒屋・和泉屋清左衛門の息子・清十郎は放蕩の末に勘当され、姫路城下町の米問屋・但馬屋の手代として奉公、但馬屋の一人娘お夏と深い仲となるが、嫉妬した番頭が但馬屋の金を盗み、その罪を清十郎になすりつける。清十郎は激怒のあまり逆上し番頭を殺してしまう。お夏と清十郎は手に手を取って但馬屋を後にした。〉

お夏と清十郎は飾磨港までやって来て、船で大阪へ出立しようとしたとき、追っ手によって清十郎は捕らえられ、お夏は連れ戻された。お夏は自宅謹慎処分となり、清十郎は船場川の河原で討ち首となってしまった。

清十郎の処刑のことは、自宅謹慎中のお夏には知らされなかった。お夏は、ただただ愛しい清十郎の

ことばかり

「今頃、清十郎さま、牢で淋しい想いをしていることやら…一目会いたい」

そんな想いを馳せるお夏の毎日だった。

ところがある日のこと、堀の外で近所の子供たちの歌声が聞こえた。

清十郎殺さば お夏も殺せ

同じ刃で もろともに…

お夏は、ただならぬ歌の文句に動転したのである。

「清十郎さまは死んでしまったの?…」

お夏は、悲しみのあまり発狂したのだ。それからというもの、清十郎の姿を求めて、町をさまよい歩く。

向ふ通るは

清十郎じゃないか

笠がよふ似た

すげ笠が

「恋しい清十郎さま…」

恋人を呼ぶお夏の悲惨な姿は、町の人々の涙を誘った。

狂乱したお夏は、その後、どうなったのか。

身を隠し七十歳まで生きた、とか、自殺して果てた、とも伝われ（原文ママ）ている。

一説には、お夏は清十郎の室津の実家までゆき、そこで清十郎が討ち首になって既に死に果てたことを知り、清十郎の後を追って、室津の海に身を投げた…とも伝えられているが、定かでない。

お夏・清十郎の悲恋を哀れんだ但馬屋の主人、九左衛門は、天国で二人が永久に結ばれるように…との願いを込め、野里の慶雲寺に“比翼塚”を建立し供養をしたのである。“比翼塚”には今も、二つの小さな石塔が仲良く並んでいる。毎年八月、同寺において、その供養が執り行われているという。

<引用終わり>

『国文学解釈と鑑賞』においても取り上げられていないのが、室津という清十郎の出身地である。遊郭があることからのみ解釈が用いられているようだが、清十郎がお夏と逃げようとしてどこに着くかを

見てみよう。「乗りがかった船と同じで、こうなった以上途中から下りることはできず、清十郎はお夏を盗み出して。日の暮れぬうちにと飾磨津の港へ急いだ。「上方へ行って暮らそう。つらい貧乏世帯でも二人一緒なら我慢もできようから」と、あわただしく旅支度、大阪への定期便に乗ろうと思いついたからである。浜辺の小さな家で船を待ち、いよいよ乗船。船客は、思い思いにそれぞれの旅姿、伊勢参宮の人もあれば、大阪の小道具売り、奈良の具足屋もいる。醍醐の法印、高山の茶筌師、丹波の蚊帳売り、京の呉服屋、鹿島の言触れも乗っている。俗に、十人集まれば十国の人がいるといわれるが、乗合い船は客もいろいろ、何とも面白いものである」。^(注8)

しかし忘れ物に気づいた飛脚の要請で岸部に戻ると追っ手がきていて、お夏清十郎は捕まってしまう。700両を横領した疑いで清十郎は処刑される内容であるので、やはり金銭文化の江戸らしい結末である。しかし、室津、飾磨、飾磨に出るために船場川など海、海からの文化である川と、城下町の土地の文化の衝突としては、読まれた試しがない。このような地域文化を超えて貨幣、金銀銅が流通するからであろう。江戸時代には金銀銅の象徴界が出現しているのかもしれない。だが、もしも属する文化圏が同じなら、清十郎が700両を横領した疑いも発生し得ない可能性はなかったのだろうか。それにしても読んで明確なのは船の中にはいかにも多文化な匂いが臭い立つことだ。これに繋がるのが海と川の文化だとすれば、城下町はいかに条理空間である。だから海文化は怪しい者として目をつけられるのだ。

5、中動態

丸山眞男の「唸り」を引こう。「部落共同体的人間関係は、いわば日本社会の「自然状態」であり、そのかぎりでは、また上からの近代化=官僚化(国家状態)に対する日本的「抵抗」形態のモデルを提供している。しかしそれが本来実感から抽象された規範意識一般と無縁なるものである限り、その「反抗」は、規範形成力として、したがって、秩序形成力として

は作用せず、きわめて非日常的な形で爆発するにとどまる。それはしばしば生活の場を捨て、時務の「慷慨」によって組織の媒介なしに究極価値に一挙に自己合一化しようとし、そこから書いて抵抗が体制の側での操作に吸収される結果になるか、あるいは大は待合・銀座のバーから小は村の寄合に至る「富士の白雪のえ」の放吟に、そのエネルギーを放散して再び日常的な「実感」の世界に閉じ込める。そしたら「抵抗」の二面性はちょうど日本のナショナリズムがまさに、底辺の家族愛あるいは部落愛を体制全体に動員する方向と、官僚的國家の主義の方向との合流から成り立っている(略)」。^(注9)これはメタレベルで正しい実感がある。日本には「究極価値に一挙に自己合一化」するイントラフェストーム的な態度がある。これを祭りの中動態と呼ぶこともできよう。しかし、祭りの中動態も、日常の中動態のベタなレベルに落とし込む日本文化もあるだろう。なら鶴見俊輔の『限界芸術論』に出てくる、草刈りの作業歌(それが恋愛歌に転用されるが)^(注10)やあるいは柳宗悦の民藝(運動)の作品があるやもしれない。あの太陽の塔の岡本太郎のアヴァンギャルドとモダニズムの対極主義^(注11)も、実はこの二つの中動態の間で維持されるべきを、縄文へと標準を合わせてしまうのが大きな失敗だったのかもしれない。ここで思い出すべきは、木村敏が『芸術の中動態: 受容/制作の基層』という好著を書いた森田亜紀との対談^(注12)で、自分の言う中動態が患者の病の時の状態であり、それに接近するときの態度であり、作家が作品を立ち上げるような時の様態を指したりはしませんと「引く」態度を示したことだ。姫路のあの城下での屋台の担ぎに対して木村敏ならば、せめて日常のイントラフェストームにすべきだし、つまりこんな過剰な躁状態(海と山を超えるような躁状態)の祭りはやめるべきだし、ましてや、市民の精神には良くないことが起きますと言えるのではないだろうか。

また、この躁状態が、今では、ADHDに付随することも多くなるような観点も出てきている。する

と丸山の嘆きを向ける対象は合理的配慮を受ける「弱い者」の「弱さ」を十分に使用することで強者になるリスクも現在のSNS社会では生じてきているようである。さらに昭和世代でそのような特性があることを使って上に登りつめた権力者が評議会的活動を消去するために上記の弱さを持つ強者とタッグを組んで日本の文化的達成を崩壊させていく現状が明確になってきている以上は、今や合理的な配慮とは何かとの議論が必要であり、これについては稿を改めたい。合理的な配慮が一人歩きすればそれが悪しき中動態である。ゆえに悪用もあり得る。

注

- (注1) <https://www.kankokeizai.com/>「ザ祭り屋台」%E3%80%80トンみこしが9台%E3%80%80姫路城広場を/
 (注2) <https://www.city.himeji.lg.jp/shisei/0000024967.html>
 (注3) 篠原進、木越治「対談、西鶴研究の現在、そして未来へ」、p38—60、国文学解釈と鑑賞別冊、西鶴 挑発するテキスト、木越治編集、至文堂、2005年
 (注4) 小野谷敦「反・色道文化論」、同上雑誌、p278—285
 (注5)、ヤン・シーコラ「西鶴と到富譜—井原西鶴の作品にみる町人像及びその変遷」、同上雑誌、p225—234
 (注6) https://www.imes.boj.or.jp/cm/exhibition/2008/mod/08toku_anseileef.pdf
 (注7) <https://kobecco.hpg.co.jp/19205/>
 (注8) 井原西鶴（谷脇理史（訳註））、『新版 好色五人女 現代語訳付き』、角川ソフィア文庫、p31、2013年
 (注9) 丸山眞男セレクション、位置4443、平凡社、電子版、杉田敦（編）、2015年
 (注10) 鶴見俊輔、『限界芸術論』、ちくま学芸文庫、p21、1999年
 (注11) 倉林靖、『岡本太郎と横尾忠則』（新版）、

LLPブックエンド、2011年

(注12) 木村敏、森田亜紀対談「臨床哲学／芸術の中動態」、in現代思想特集、木村敏 臨床哲学のゆくえ、p7—p37、青土社、2016年